

1. 国際化関連 (1) 多様性

④全学生に占める外国人留学生の割合【1ページ以内】

【実績及び目標設定】

各年度5月1日及び通年の数値を記入

	平成25年度 (H25.5.1)	平成28年度 (H28.5.1)	平成31年度 (H31.5.1)	平成35年度 (H35.5.1)
外国人留学生数 (A)	1,996 人	2,133 2,595 人	2,767 3,417 人	3,290 3,980 人
うち、在留資格が「留学」 の者	1,985 人	2,123 2,585 人	2,757 3,407 人	3,280 3,970 人
うち、在留資格が「留学」 以外の者	11 人	10 人	10 人	10 人
全学生数 (B)	24,611 人	23,000 人	23,000 人	23,000 人
割 合 (A/B)	8.1 %	9.3 11.3 %	12.0 14.9 %	14.3 17.3 %
	平成25年度 (通年)	平成28年度 (通年)	平成31年度 (通年)	平成35年度 (通年)
外国人留学生数 (C)	2,728 人	2,805 人	3,907 人	4,255 人
うち、在留資格が「留学」 の者	2,584 人	2,655 人	3,727 人	4,005 人
うち、在留資格が「留学」 以外の者	144 人	150 人	180 人	250 人
全学生数 (D)	24,611 人	23,000 人	23,000 人	23,000 人
割 合 (C/D)	11.1 %	12.2 %	17.0 %	18.5 %

【これまでの取組】

平成19年の大阪外国語大学との統合や平成21年「国際化拠点整備事業 (G30)」採択に伴う英語コースの創設など、教育環境のグローバル化に対応した取組を着実に進めてきた結果、平成18年は1,342人であった本学の外国人留学生数は、現在2,000人を超えている。サマープログラム参加者なども加えた留学生数を通年で計上した場合は2,728人に上る。このように、G30当初に設定された「平成32年までに3,000人の受入れ」、及び本学が昨年度に設定し直した平成32年度までに全学生の15%を受け入れるという目標の達成に向かって順調に推移している。

【本構想における取組】

世界適塾構想における「調和ある多様性」を実現するためには、将来の知を支える学生の多様性を拡大し、バックグラウンドを異にする学生間の切磋琢磨と知の交流を積極的に促すことが重要になる。

- ① 今後は、海外からの交換留学生を対象として学期中に実施されているプログラム群 (OUSSEP、iExPO、Maple) に加え、カリフォルニア大学の協力を得て、留学生が参加し易い夏季休業期間に行うサマープログラムを新たに開発し、優秀な外国人学生が本学に関心を持つきっかけとする。
- ② 国際通用性が高い研究指導型短期留学プログラム (FrontierLab@OsakaU) は、参加者が卒業後に本学大学院に進学することも期待できるため、同様のプログラムの文系学部への拡大を図る。
- ③ また、英語コースの新設と歩調を合わせ、その一部を短期留学生にも開放して専門的で特色あるプログラムを増やすなど、大学全体として英語による授業科目の数を増やす。
- ④ その一方で、交換留学生等からのニーズが高い日本語授業科目については、加速度的履修も可能とするマルチトラック化を進め、留学生の幅広いニーズに応じ得るように整備する。
- ⑤ 加えて、留学生獲得のチャンネルを多様化する。具体的には、本学は青少年交流事業等で来日した外国人高校生の受入れにも積極的に応じてきたことを契機として、AFS (American Field Service) や地元教育委員会などの協力を仰ぎながら、日本留学中の外国人高校生を対象としたオープンキャンパスを開催する。
- ⑥ なお、日本語能力に多少難があっても学業成績が抜群である海外の高校生を特別枠扱いで選抜し、渡日前入学許可を与え、日本語を中心とした半年間の予備教育を提供する「海外在住私費外国人留学生特別入試」を平成28年度に開始する。

1. 国際化関連 (4) 語学力関係

④学生の語学レベルの測定・把握、向上のための取組【1ページ以内】

【実績及び目標設定】

各年度大学が定める時点の数値を記入

	平成25年度 (H25.11)	平成28年度 (H28.8)	平成31年度 (H32.3) (H31.6)	平成35年度 (H36.3) (H35.6)
外国語力基準	TOEFL-iBT79 (ITP550)※他の語学試験のスコアが同水準である場合を含む			
外国語力基準を満たす学生数 (A)	1,540 人※	6,500 人	11,000 人	17,600 人
うち学部 (B)	1,007 人※	4,000 人	7,000 人	10,850 人
うち大学院 (C)	533 人※	2,500 人	4,000 人	6,750 人
全学生数 (D)	24,611 人	23,000 人	23,000 人	23,000 人
うち学部 (E)	16,085 人	15,500 人	15,500 人	15,500 人
うち大学院 (F)	8,526 人	7,500 人	7,500 人	7,500 人
割合 (A/D)	6.3 %※	28.3 %	47.8 %	76.5 %
割合 (B/E)	6.3 %※	25.8 %	45.2 %	70.0 %
割合 (C/F)	6.3 %※	33.3 %	53.3 %	90.0 %

※H25 時点では全学的に学生の外国語能力を把握することができていないため、実際に把握できている学生数のみ計上(外国語学部分のみ全在籍者分を把握)。

【これまでの取組】

全学教育推進機構において、学部1年生全員を対象としたTOEFL-ITP試験を実施しており(11月)、共通教育「実践英語」の成績評価においてTOEFL-ITPスコアを換算(30%)するなどして語学力修得に係る意欲向上を促している。また、TOEFL等と同様に世界で広く利用されているIELTSについても事前対策講座・学内試験を実施するほか、ブリティッシュカウンシルの協力を得て短期型の「実践英語力強化講座」に昨年度から取り組んでいる。これに加え、英語環境に慣れ親しむ観点からグローバル・コモンズ等を介した留学生との英語での交流機会を充実している。

語学力を一定程度備えた学生については、短期留学生用の英語による授業「国際交流科目」や学部の英語コースの英語で提供される授業科目の履修を通じ、語学力と教養・専門性の育成を図っている。また、学内の支援制度も活用しつつ、長期休暇を利用した海外語学研修や短期海外派遣等の機会を経て、更なる語学力の獲得に励んでいる。

英語力以外では特段のスタンダードは設定していないが、例えば外国語学部ロシア語専攻では、ロシア教育科学省認定試験を利用して語学教育の質保証を図っている。

【本構想における取組】

世界適塾構想が標榜する「調和ある多様性」は、共通言語を英語に一元化するものではないが、一方で世界の多くの学生が英語修得に注力し、現在のビジネスの現場では英語が主流である中においては、グローバルスタンダードとしての英語力の育成、強化への対応が求められる。

本学の海外派遣の基準はTOEFLiBT79(=ITP550)相当の英語力としており、当面はこれを達成する学生の増加が急務である(本構想期間中に学部生の平均点が550、大学院生が600となることを目指す)。このため、現在受験させているTOEFL-ITPを1セメスター終了後に移行し、2年次にも受験するよう義務付けることで自主的学修を促す仕組みを導入する(状況を見ながら卒業年次での実施も検討)。実践英語力強化講座を語学力アップの手段として引き続き活用しつつ、クォーター制移行後は英語教育をより短期集中型に変え、集中的に能力を獲得することを可能とする。

語学力は学修時間との相関関係が高く、効果的な修得のためにはいかに自主学習を促すかが鍵である。eラーニング教材やCLE(授業支援システム)を介した充実した自習・復習等を促すよう、FD等を通じ語学授業の方法の改善に努める。これらの取組を通じ目標を達成した学生は、当該エフォートに応じた奨励的な支援が得られるようにする。

(大学名:大阪大学)(申請区分:タイプA)